

# 一階でよろしく

手嶋ひろ美

三年生のクラスがえて、さとみはまた真紀ちゃんとおなじクラスになりました。

「やったあ」

あたらしいクラスの発表をみて、さとみはほっとしました。真紀ちゃんとは、一年生からのなかよしです。これでもた、毎日いっしょにあそべます。

二年生までのときとおなじで、三年二組は一階の教室でした。校庭のチューリップとパンジーの花壇が、まどのそとにみえています。

真紀ちゃんはまだきていません。教室のまえでまっぴると、うしろから女の子の声がしました。

「ひょっとして佐藤さん？」

ふりかえると、髪のみじかい、めがねの子がたっていました。上ぐつに「木下はるか」とかいてあります。さとみはちょっときんちょうしました。「はじめまして」

のあいさつは、第一印象がだいじです。

けれど口をひらこうとしたさとみを、木下さんにはらみつけました。

「ふうん、ほんとに足わるいんだ」

さとみを上から下までながめて、そのまま教室に入っています。

さとみはびっくりしてしまいました。

さとみは車いすにのっています。あるけないのはうまれつきで、家や教室では赤ちゃんのように、はいはいしてうごきます。だから、かわった目でみられることは、いままでにもありました。けれど、あんなこわい目で見られたのは、はじめてです。

「おはよう、さとみちゃん」

ききなれた声にかおをあげると、真紀ちゃんがろうかをはしってくるのがみえました。

「またおなじクラスだあ。やったね」  
真紀ちゃんがさとみの手をとって、ぶんぶんふりま  
す。車いすごとゆらゆらとゆられるうちに、さとみはやつと  
びっくりがとけて、ほっとしました。

「うん、よかったあ」  
車いすをおりて、さとみは真紀ちゃんといっしょに教  
室にはいりました。

出席簿の順番で、さとみは一番まえの席になりました。  
右どなりは小林くん。うしろが真紀ちゃん。さとみはこ  
ころの中で手をたたきました。席がえまでは、真紀ちゃ  
んとまえうしろでいられます。

ところが、あくる日になって、朝の会で木下さんが一  
番うしろから手をあげました。

「先生、この席、やっぱり黒板がみえないので、佐藤さ  
んの席とかわってほしいです」

なまえをよばれて、さとみはギクッとしました。

「佐藤さんは足が不自由だから、先生はまえの席がいい  
とおもうのよね。ほかの席じゃだめ？」

「おれ、かわってやってもいいよ」

まどぎわのまえの子がせっかくいってくれたのに、木  
下さんはまだくさいがります。

「その黒板のまえがいいです。みえやすいから」

「はるかちゃん、いったらわるいよ」

水野さんがとめに入ってきます。けれど、木下さんは  
たちあがって、かちほこったようにいいました。

「だってそうじゃない。席もかえられなかったし」

「それは、つくえのあいだがせまくて、あるけないとい  
うしろの席までいけないから——」

さとみのいいわけはきいてくれそうにありません。

「じゃあ、なんでもうちのクラスだけ一階の教室になっ  
たかしてる？　ほかの三年生は三階なのに」

「たまたまだろ」

そういう小林くんに木下さんは首をふりました。

「ちがうよ。佐藤さんがいるからなんだって。お母さん  
がいったもん」

「えっ、そうなの？」

だれかがすっかりした声がありました。

「三階だったら、校庭の花壇が花のじゅうたんみたいに  
みえたのにさ」

「へえ、だったら私も三階がよかったなあ」

「私たちも、きょねん二階の教室だったから、つきは三  
階だともって、たのしみにしてたんだけど」

水野さんがえんりよがちにさとみをみます。さとみは  
うつむいて、耳をふさぎたくなりました。

そのとき、うしろで声がありました。

めがねごしにちらりとみられて、さとみはかおをふせ  
ました。

ゆずったのは先生でした。

「じゃあ、佐藤さんのうしろの清水さん、かわってあげ  
てくれる？」

「えっ」

さとみはおもわず真紀ちゃんのかおをみました。でも、  
先生にいわれてはしかたありません。

木下さんは、真紀ちゃんといれかわりにやってくるど、  
かばんをドンツとつくえにおきました。

「よろしく、木下さん」

さとみがいったのにへんじもしません。さとみなんか  
目に入らないみたいに、通路むこうの水野さんに手をふ  
っています。まえからの友だちみたいです。

——なによ、かんじわるい。

よりによって木下さんがうしろにくるなんて、さいあ  
くです。さとみはさっさとまえをむきました。

でも、もっとさいあくだったのは、休み時間になっ  
てからでした。

先生がいなくなったとたん、木下さんがいったのです。

「やっぱり佐藤さんて、ひいきされてるんだ」

おどろいてふりむくと、まわりの子がさとみをみまし  
た。

「さとみちゃんは足がわるいんだから、しょうがないじ  
ゃん」

まえへでてきたのは真紀ちゃんでした。

「階段は車いすでいけないから、はいはいでのぼるの、  
すぐたいへんなんだよ。私、しってるもん」

「だからって、一階にしたらえちゃうわけ？　そんな  
の、やっぱりひいきじゃん」

「ひいきだって、ひいきだって」  
木下さんにつられて、まわりがひそひそします。

「やめなよ。そんなこといっちゃいけないんだよ」  
「教室なんて、べつにどこでもいいじゃんか」

真紀ちゃんと小林くんがかばってくれています。

——私もあるけたらよかったのに。

いすにこしかけたまま、さとみは自分の足をおろし  
ました。みかけはふつうの足なのに、どうしてこのま  
またちあがれないのでしょうか。みんなのように三階の教室  
まで階段をのぼれたら、こんなことにはならなかったの  
です。

でもそれは、さとみのせいでも、お母さんのせいでも  
ありません。うまれてきたら、さとみはあるけないから  
だったのです。そして、これからもこのままなの  
です。おちこんだってかわりません。

——わかっている。ちょっと、かなしくなっただけ。

こみあげるものをためいきといっしょにはきだして、さとみはかおをあげました。

「ねえっ」

声をかけて、一瞬しずかになったすきに、さとみは口をひらきました。

「教室が一階になったのは、私があるけないからかもしれないけれどさ」

木下さんがまたなにかいうまえに、さとみはいそいでいいました。

「木下さんだって、黒板みえにくいって言って、先生に席かえてもらったじゃない」

「だって、うしろじゃみえないから——」

「私だって、三階じゃ階段のぼれないもん」

木下さんをさえぎって、さとみはつづきました。

「席をかえてもらうのはよくて、教室かえてもらったらだめなの？ ひいきなんて、そんなのないよ」

くちびるをかんでみつめると、木下さんはだまりこみました。真紀ちゃんと水野さんが、心配そうにさとみたちをみています。

「それに、きっとさあ。私じゃなかったって、先生はおなじようにしたよ」

「そうかな」

「そうだよ。もしも木下さんがあるけなくっても」

さとみがいうと、木下さんはうらめしそうに口をとがらせました。

「席はもどしてあげないよ。教室一階にしてみたら、なかよしの子もうしろの席だなんて、ずるいんだからね」

「いいよ、べつに。真紀ちゃんとは、まえうしろじゃなくたってあそべるもん。ねーっ」

さとみが真紀ちゃんとうなずきあってみせると、木下さんがふてくされます。

「それに、花壇がじゅうたんみたいにみえるっていうのは、みにいきたいのもわかるしさ」

さとみがいうと、水野さんが意外そうにしました。

「佐藤さんもいつてみたいの？」

「だって、きれいなんでしょ？ いいよね、みんなはみにいけて」

「へえ、いけなくても、いきたいんだ」

あっけにとられる木下さんに、小林くんがちゃちゃをいれます。

「木下、おぶってってやれば？」

「えっ」

木下さんが、ことばにつまってかたまります。

まどから校庭の花壇をながめて、肩をすくめたのは水野さんでした。

「まあ、一階もいいよね。お花は、ちかくでみてみきれ

どきどきしながらそういうと、木下さんがギョッとしたかおになりました。

「はるかちゃん」

水野さんにそでをひかれて、木下さんがうつむきます。やがて木下さんはあきらめたように、いすに腰をおとしました。

「なによ。そんなふうにいわれたら、いいかせないじゃない」

つくえにつつぶす木下さんに、小林くんがあきれました。

「おまえがいいだしたからだろ」

「だって、佐藤さんのせいで一年生とおなじ一階なんて。二年生だって二階なんだよ。三年生は三階で、花のじゅうたんも毎日みられるはずだったのに」

木下さんがふくれます。

「そんなこといったって、しょうがないでしょ」

「それであんなこといったわけ？」

「ひっどおい」

「だったら、ひとりでかってにみにいけよ」

さっき「ひいき」とはやした子たちが、ぼつがわるそうに文句をいきました。ちょうどチャイムがなるのをきいて、つぎつぎ席にもどっていきます。

「わるいね、三階にいけなくて」

「いだし」

「そういうことにしてあげてもいいよ」

木下さんはまだつよがります。

「ちょっと、なにそのいいかた」

真紀ちゃんは気にいらなそうです。

けれど木下さんの目は、もうさとみをにらんではいませんでした。

さとみと目があうと、わざとらしくめがねをおしあげて、木下さんはまどのそとをむきました。花壇のバンジーとチューリップが、風にそよいでいるのがみえます。

「ここからのながめも、わるくないよね」

木下さんをまっすぐみつけて、さとみはにっこりわらいました。